

# 高齢者の生活実態等アンケート調査実施結果

---

- 高齢者の生活実態に対応した住宅防火対策のあり方に関する検討部会（第2回）

## 調査対象

全国65歳以上の高齢者（900人）

調査人数構成	65～70歳	71～75歳	76～80歳	81歳以上
一人暮らし	50	50	50	150
高齢者のみ世帯	50	50	50	150
高齢者以外と同居世帯	50	50	50	150

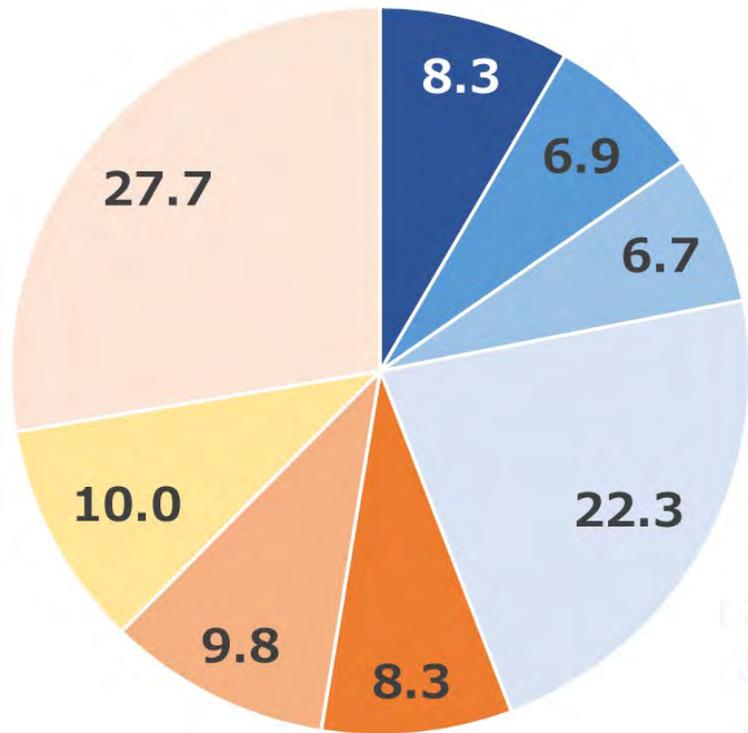
## 調査方法

質問用紙による自記入式アンケート調査

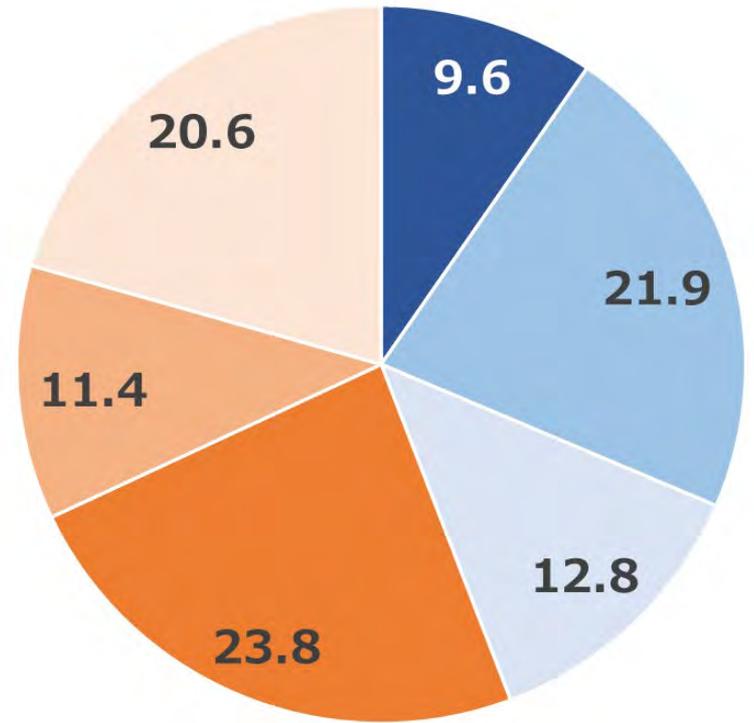
## 調査実施期間

2020年11月13日～11月15日

## 性別・年齢・世帯構成



- 男性-65歳～70歳
- 男性-71歳～75歳
- 男性-76歳～80歳
- 男性-81歳以上
- 女性-65歳～70歳
- 女性-71歳～75歳
- 女性-76歳～80歳
- 女性-81歳以上



- 一人暮らし-男性
- 高齢者のみ世帯-男性
- 高齢者以外と同居世帯-男性
- 一人暮らし-女性
- 高齢者のみ世帯-女性
- 高齢者以外と同居世帯-女性

# アンケート調査実施結果について（火災リスク等について）

		全体	年齢別	世帯構成別
調理用の加熱器具	使用状況	・毎日使用者が9割超 ・燃料はガスが約7割、電気が約3割 ・平均使用年数は8.8年 ・ガスこんろ使用者のうち安全装置がついている割合は8割超	・76～80歳は調理用加熱器具の平均使用年数が全体より0.5年長く、10年以上使用率も3.5ポイント程度高い	・一人暮らし世帯は、ガスこんろの使用率が5ポイント以上高く、かつ安全装置がついていない割合が全体より5ポイント以上高い ・高齢者以外と同居世帯は、電気の使用率が全体より5ポイント以上高い ・高齢者のみ世帯は、安全装置のついたガスこんろの使用率が全体より5ポイント以上高い
	危険を感じたこと	・「危険を感じたことがある」割合は約16% ・「火元から離れて油等を加熱しすぎた」が10.9%と最多	・年齢が上がるにつれ「危険を感じたことはない」の割合が上昇する	・高齢者以外と同居世帯は「危険を感じたことがある」割合が全体より5ポイント以上高い
暖房器具	使用状況	・毎日使用者が75.2% ・燃料は石油が47.4%、電気が37.1% ・最も使用している暖房器具の平均使用年数は8.9年	・65歳～70歳は石油の割合が全体より3.4ポイント程度高い	・高齢者以外と同居世帯は石油の使用率が全体より10ポイント以上高い ・一人暮らし世帯は、石油の割合が全体より約15ポイント少なく、半数以上が電気燃料の暖房器具を使用
	危険を感じたこと	・「危険を感じたことがある」割合は約9% ・「消し忘れて外出した」が6.8%で最多	・65歳～70歳は「消し忘れて外出した」割合が約5ポイント高い	・世帯構成別では大きな差異はみられなかった
喫煙	使用状況	・本人もしくは同居家族が喫煙者の割合は全体の1割程度 ・喫煙場所はその他を除くと「居間」が最多	・年齢が上がるごとに喫煙率（本人もしくは同居家族）は減少	・高齢者以外と同居世帯が最も喫煙率（本人もしくは同居家族）が高い
	危険を感じたこと	・「危険を感じたことがある」割合は約23% ・「消したつもりが完全に消火していなかった」と「絨毯等に火種が落下した」がそれぞれ10%程度	※サンプル数僅少のため記載なし	※サンプル数僅少のため記載なし
灯明	使用状況	・灯明を定期的（毎日～週1日）に使用している方は全体の約半数	・年齢が高いほど、灯明の平均使用日数、定期的な使用率ともに高くなる傾向	・高齢者のみ世帯は灯明を使っていない割合が全体より5ポイント以上高く、毎日使用者も5ポイント以上少ない
	危険を感じたこと	・「危険を感じたことがある」割合は約10% ・具体的な危険については、「ろうそくや線香が倒れた」が最も多く約10%	・71歳～75歳は「危険を感じたことがない」が93.5%と全体より5ポイント以上高い	・高齢者以外と同居世帯は具体的な危険として、「ろうそくや線香が倒れた」が全体より約5ポイント高い
コンセント	・「清掃していない」が全体の約半数 ・コンセントの危険な使用状況としては、「たこ足配線となっている箇所がある」が全体の半数と最も多い	・65～75歳は「使用しないときはコンセントから抜いている」の割合が低いが、76歳以上は高い	・一人暮らし世帯は清掃している割合が全体と比べて5ポイント近く高い	
電化製品	・電化製品を故障するまで使用している割合は全体の約80%	・「細かな操作が難しくなった」「操作方法を忘れる事がよくある」「電源の消し忘れが多くなった」は年齢が上がるにつれ増加していき、特に76～80歳で大きく増加する	・高齢者以外と同居世帯は、電化製品を故障するまで使用している割合が全体より5ポイント以上高い	
居住の環境	・「生活用品が多い」が全体の61.3%と多い	・「生活用品が多い」は年齢が上がるにつれ、あてはまる方が減少していく	・高齢者以外と同居世帯は「生活用品が多い」「洗濯物や衣類が収納されていない」ともに全体より7ポイント以上高い	

- 様々な火災のリスクに対しては、**全体的に「危険を感じたことがない」が多い**。火災の危険を感じた割合は、喫煙、調理用の加熱器具、灯明、暖房器具の順で多く、最も多い喫煙でも23%（本人もしくは同居家族が喫煙者ベース）であり、**火災に直結するような火の不始末はあまり経験していないといえる**。
- 年齢別に特徴的な火災リスクをみると、**前期高齢者は暖房器具、喫煙、コンセントの清掃、生活用品の多さ、後期高齢者は灯明、身体の衰えによる電化製品の操作ミスや消し忘れが高く、危険性が高いといえる**。
- 世帯構成別でみると、**一人暮らし世帯は、調理用の加熱器具（安全装置のついていないガスこんろを使用している割合が高い）、高齢者以外と同居世帯は、喫煙、電化製品の長期使用、生活用品の多さが主なリスク**といえる。高齢者のみ世帯は、顕著なリスク項目はみられなかった。

# アンケート調査実施結果について（火災予防対策・防火意識について）

	全体	年齢別	世帯構成別
<b>防災品</b>	・「防災品を使用しておらず、今後も購入の予定は無い」が全体の約1/3	・76歳～80歳が防災品現使用・今後使用意向ともに最も高い	・世帯別では大きな差異は見られなかった
<b>住まいの状況</b>	・住居の形態は「戸建て」が全体の77.7% ・築年数は「31年以上」が最も多く全体の約6割 ・生活場所の状況として「居間と寝室が別」が85%	・年齢が上がるにつれ、「居間と寝室が一緒」の割合が高くなる傾向がある	・一人暮らし世帯では「戸建て」は全体より20ポイント程度少なく「マンション・アパート」居住者が4割超 ・高齢者のみ世帯では「居間と寝室が別」が全体より7ポイント程度高い
<b>火災発生時避難を行う自信</b>	・自信がある計が61.1%と自信がある方が多い。 ・自信がある理由としては「二方向以上の避難経路があるため」と「健康に自信があるため」がともに約半数 ・自信がない理由としては「健康に自信がないため」が46.3%で最多	・年齢が上がるにつれ、自信がある計は減少していく ・自信がある理由として、71歳～75歳では「健康に自信があるため」が63.2%と全体より10ポイント以上高い ・自信がない理由として、81歳以上は「健康に自信がないため」が63.4%と全体より10ポイント以上高い	・高齢者以外と同居世帯が最も自信がある計が少なく、全体より7ポイント程度少ない ・自信がある理由として、高齢者以外と同居世帯では「常に家族等の助けがあるため」が全体より25ポイント以上高い ・自信がない理由として、高齢者のみ世帯では「火災発生時の対応を決めていないため」が40.4%と全体より10ポイント以上高い
<b>消火器具</b>	・（例示したような）消火器等を設置している方は5割強 ・消火器具の使用法について、わからない方は8.8%と少ない ・自宅で最も古い消火器具の平均経過年数は8.0年	・65歳～75歳は消火器等を設置していない割合が半数以上にのぼる	・高齢者のみ世帯は、半数が住宅用消火器を設置している
<b>警報器・報知設備</b>	・約7割は住宅用火災警報器を設置しており、設置場所は台所が72.2%で最も多い ・住宅用火災警報器設置からの年数は、全体では平均9.0年	・65歳～70歳は住宅用火災警報器も自動火災報知設備のどちらも設置していない方が28.7%と全体より5ポイント以上高い	・一人暮らし世帯は住宅用火災警報器を設置している割合が61.7%と全体より5ポイント以上少ない ・一人暮らし世帯は火災警報器設置からの平均年数が8.5年と平均より0.5年短く、高齢者以外と同居世帯は9.4年と0.4年長い
<b>防火意識</b>	・災害時に協力できるような日常的な近所づきあいについて、「近所づきあいがある」が66.1% ・住宅火災から身を守る上での不安については、不安がある計が54.7% ・住宅火災から身を守る上で不安な事項は、「火災発生時の初期消火方法について」が49.9%で最も多い	・76歳以上は近所づきあいがある割合が高い ・年齢が上がるにつれ、不安がある計は増加していく	・高齢者のみ世帯は、近所づきあいがある割合が全体より4ポイント程度高い
<b>防火対策</b>	・住宅防火診断を受けた事がある方は13.3% ・住宅防火診断を受けた事がない理由は、「実施しているのを知らなかった」が73.2%と大半を占める ・防災のアドバイスを受けたい相手は消防職員・団員が73.3%で最多	・年齢が上がるにつれ、住宅防火診断を受けた事がある割合は増加する ・防災のアドバイスを受けたい相手は、65歳～70歳では家族・親族が6.8%と全体より10ポイント以上低い、反対に81歳以上では23.1%と全体より5ポイント以上高い	・防災のアドバイスを受けたい相手は、高齢者のみ世帯では消防職員・団員が全体より5ポイント以上高いが、高齢者以外と同居世帯は家族・親族が全体より5ポイント以上高い

- ・ **消火器具については5割強が設置しており、火災警報器については約7割が設置している。**前期高齢者については、消火器・警報器・火災報知設備の設置率が低い。
- ・ **火災発生時避難を行う自信については6割以上があると回答。**自信がある/ないともに、理由としては**自身の健康状態によるものが大きい。**年齢が上がり健康への自信がなくなるにつれ、自信がある割合は減少していく。
- ・ **住宅防火診断については、受けた事がある割合は13.3%に留まったが、アドバイスを受けたい意向は低くないことから、受けた事がない理由は認知度の低さによるものであることが考えられる。**